

地域研究の最前線の気概

——特集2「『三つの祖国』に生きる越境者」によせて

谷垣真理子

I 企画者の気概

「『三つの祖国』に生きる越境者」は、華人とユダヤ人を並べた企画である。地域研究は、対象とする地域の個性を叙述すると同時に、他の地域にも共通するような地域横断的な普遍性をさぐる学問である。華人とユダヤ人を並べたところに、企画責任者の篠崎香織氏の気概が感じられた。

本特集の各論文の完成度は高く、読み応えがある。評者は北論文を読んで始めて、かつて推薦状を書いたことのあるブランダイス大学の由来を知り、大学関係者が「ユダヤ人のための大学」と説明してくれたニューヨーク大学で

さえ、かつてユダヤ人学生の入学制限が非公式にあったことを知った。各論文すべてが対象の奥深くまで掘り下げた力作揃いであった。

一般に、越境者の研究は、出身地と受け入れ先の双方を視野に入れる必要がある。これは「言うは易く行うは難し」である。例えば、ペナンの華人をとりあげた篠崎氏は、英語と中国語の資料を使うほか、行間からマレー語に堪能であることがうかがえる。オランダ在住のインドネシア出身の華人をとりあげた北村氏は、インドネシア語と英語で聞き取り調査を実施し、オランダ語の文献も使っている。こうした言語的なスキルは、これらの論文が華人コミュニティの研究にとどまらず、東南アジア研究として評価されうることを担保している。

一方、村岡論文と北論文は、ユダヤ人研究への造詣の深さを感じさせた。ヘブライ語やイディッシュ語の造詣もある両氏の研究は、アメリカにおける移民コミュニティの研究であるにとどまらず、「ユダヤ人研究」としても評価されうる深みを感じさせる。また、奈倉氏はこれまで廈門をフィールドにしてインドネシアやベトナムからの帰国華僑について精力的に研究してきたが、本特集ではミャンマーからの帰国華僑に挑戦した。インタビュイーの出身地であるミャンマーで現地調査を実施し、東南アジア研究の要素をもちこんだ。

評者はこれまで香港の政治発展と社会変化について、一九八〇年代以降の各種選挙を中心に論稿を発表してきた。二〇〇九年に、広東の関元昌一族のリユニオンに参加して以降、香港を起点とする移民とそのネットワークについても論稿を発表するようになった。以下、華人研究を中心に、自分なりに本特集を読み解いてみたい。

Ⅱ「祖国」と「ホーム」

特集の企画者である篠崎氏によれば、従来の研究は越境

前の国家と越境後の国家という二つの軸を設定し、その間で越境者のアイデンティティをとらえてきたという。これに対して、篠崎氏は二項対立では越境者の多面的なアイデンティティを十分に解明できないとして、「ルーツの祖国」「暮らしの祖国」「理念の祖国」という「三つの祖国」という枠組みを導入した(二二二頁)。また、篠崎氏は、越境者のアイデンティティが時期や置かれた環境によって変化すること、またその際に越境者がよりよい人生を歩むために戦略的な選択をすることを、強調している。

「三つの祖国」という枠組みは、変化するアイデンティティを巧みにとらえている。評者は越境者と国家との関係を重視するという理由づけがなされているにせよ、「祖国」という用語にはやや違和感を覚えた。評者がフィールドとする香港は、中国大陸からの移民社会であった。とりわけ、中華人民共和国成立後、「中国」をどのように認識するのか、あるいは「中国」とどのようにつきあうのが、人々にとって重要な思想的課題であった。「祖国」である「中国」から意識的にせよ、無意識的にせよ移動してきた人々にとって、「祖国」という用語そのものが、政治的アイデンティティのあり方と無縁ではなかった。

本特集でも、奈倉論文は「祖国」ではなく「ホーム」を

使用している。奈倉氏はアイデンティティを国家のみを基準に考えていないと述べ、「祖国」「ホームランド」「ホーム」「故郷」について説明している。また、北論文でも「社会的正義」を実現するための「基地」という意味で「ホーム」を使っている。評者は、「ホーム」は「祖国」と並ぶ重要な概念であると思うが、残念ながら、本特集では「ホーム」について、リード文で明確な説明が付されていない。奈倉論文の冒頭で概念整理がなされているものの、やはり特集の冒頭のリード文で整理があった方が読者には親切であった。

また、「三つの祖国」があらわれる背景には、ユダヤ人や華人のもとでの居住国／地や、移民先のアメリカや東南アジアの地域事情の変化が影響している。自身が議論している地域について、読者がどの程度の知見があるかを意識して書くことで、読者の論文への理解度が増すように思われる。特集を読んで、評者自身、東南アジアについての知見が不足していることを自覚した。奈倉論文や北村論文で、ミャンマーや中国、インドネシアの変化を概説してくれていたのはありがたかった。これに対して、篠崎論文では、ペナンや、論文中に出てくるシンガポールやマラヤが示された地図や、ペナンの面積や人口などごく基礎的な説

明が欲しかった。

細かなことであるが、評者は論文が日本語で書かれた以上、図表もまず日本語を付し、その次に原語を付け加えるという形がよいように思う。「地域研究」の読者ならば英語は理解できるだろうが、やはり異なる地域の研究者が読むことを考えれば、漢字を使う中国語もできるだけ翻訳した方がよいと思う。奈倉論文では、図表に英語や中国語の原語がそのまま使われていて気になった。「閩南」（二〇八頁）は、その地域を知る者にとっては、説明はいらないが、はたしてすべての読者にわかる単語であろうか。

Ⅲ 一九八〇年代以降の変化と日本

現在の日本に視点を移せば、華人研究は、自分たちと直接関係のない外国の出来事ではない。特集では「華人」という用語を使っているが、日本のメディアでは「華僑」という用語が一般に使われる。「華僑」と「華人」を区別する指標として、しばしば国籍が用いられる。「華僑」は中国籍を保持するが、「華人」は居住国の国籍を有する。「僑」は「仮住まい」を意味し、華僑は中国文化を保持

し、外国に居住する「中国人」であるという印象を持たれやすい。

しかし、現実には多様である。プロ野球の王貞治氏は、第一回ワールド・ベースボール・クラシック大会で日本チームの監督であり、同大会で日本チームは優勝した。氏はまぎれもなく日本球界を代表する野球人であるが、日本生まれの中華民国籍である。

さて、日本は一〇年一日のごとく「外に対して閉鎖的な社会」だといわれるが、それでも変化は起きている。日本における外来者由来のコミュニティとしては、在日韓国朝鮮系のコミュニティを、多くの人は想起するであろう。しかし、外国人登録者数を見ていくと、二〇〇七年在日中国籍者（中華人民共和国〔中国〕籍者と中華民国〔台湾〕籍者の合計）が在日韓国朝鮮籍者を追い抜いた。これは二つのコミュニティの出生率の差ではなく、中国が一九七〇年代末、改革と開放の時代へと公式に舵を切ったことで、中国人の海外出国ブームが再度訪れたからである。

こうしたなかで、日本における中国系コミュニティも変化していく。日本における華僑華人は、歴史的には福建や広東の出身者が多かったが、八〇年代以降に来日した人々のなかでは、東北三省（黒龍江・遼寧・吉林の三省）や北

京、上海などの大都市の出身者が増加し、大都市への集住傾向を見せた。東京都では二〇一四年初の数字で、中国籍者数は一六万二八〇九人を数えた。これは東京都では一〇〇人に一人以上が中国籍者であることを意味する。帰化や国際結婚の場合を考えれば、中国系に連なる人々はこの数字よりもさらに大きくなる。

読者の方々には、特集を読むときに、こうした背景も思い出してほしい。

IV さまざまな視角

日本では、華僑華人は「横浜や神戸の中華街に住む」という存在ではなくなり、日本社会の一員として活動している。横浜や神戸、長崎の春節（旧正月）の行事は、華僑華人の年中行事であるだけでなく、それぞれの地区の町おこしの一環としても位置づけられている（王二〇〇三）。東京都内の祭りで神輿の担ぎ手が不足し、当該地区以外の若者が神輿を担ぐように、中国獅子舞の演者には留学生や日本人も参加し、多文化共生的な状況が生まれている。

評者が編者として加わった『変容する華南と華人ネット

ワークの現在』(谷垣ほか二〇一四)でも、越境者の問題がとりあげられている。広東から世界各地に分散した閩元昌一族(容二〇一四)、華南からマラヤに移住し異民族と通婚した二つの家族(山本二〇一四)、マカオに渡ったポルトガル人の子孫という出自、もしくは「ポルトガリダーデ」と呼ばれる精神性を有するマカエンセ(内藤二〇一四)をとりあげた三つの論文が、そうである。三論文に共通するのは、異民族との通婚による混血という事象である。グローバル化で人の移動が加速する現在、異なるネットワークを持つ人々が出会い、新たな家庭を築く事例はいつそう現実性をおびている。

また、越境者がいかに老年期を過ごすのかも、現実的な問題であろう。海外の香港人コミュニティはいち早くこの問題に直面していた。第二次世界大戦以降、香港の将来には政治的不透明さがつきまとい、香港から海外への移民は絶えることなく続いた。一般に人は老年になると、新たな環境への適応力が少なくなり、幼年時代を懐かしむようになる。一九九四年、カナダでは人生の最後の場面で、尊厳を持って手厚いケアを受けられるよう、頤康老人ケアセンターが誕生している(谷垣二〇一〇)。

「海水のいたるところ、皆華僑あり」という言い方に見

られるように、華僑華人はいち早くグローバル化した存在である。少子高齢化社会に向かう日本において、「移民」はこれまで以上に考えねばならないテーマである。華僑華人研究は、よりよい未来の構築のためにさまざまな視角を提供してくれそうである。

●参考文献

- 王維(二〇〇三)『素顔の中華街』洋泉社。
谷垣真理子(二〇一〇)「カナダへの香港人移民」『東洋文化研究所紀要』一五七冊、一二七―一六一頁。
谷垣真理子・塩出浩和・容應英編(二〇一四)『変容する華南と華人ネットワークの現在』風響社。
内藤理佳(二〇一四)「マカエンセという人々——『中国の少数民族』もしくは『マカオ人』として」谷垣ほか編『変容する華南と華人ネットワークの現在』四三二―四五八頁。
山本博之(二〇一四)「『マレーシア華人』とは誰か?——マレーシアの映画人に見る華人性と混血性」谷垣ほか編『変容する華南と華人ネットワークの現在』四〇七―四二九頁。
容應英(二〇一四)「地域的キリスト者家族からグローバル家族への展開——華南の閩・容・張三家族の場合」谷垣ほか編『変容する華南と華人ネットワークの現在』三五一―三八〇頁。

●著者紹介●

- ①氏名……谷垣真理子（たにがき・まりこ）。
- ②所属・職名……東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻・教授。
- ③生年・出身地……一九六〇年生まれ、大分県。
- ④専門分野・地域……現代香港論、華南研究。
- ⑤学歴……東京大学教養学部（アジアの文化と社会）、東京大学大学院総合文化研究科（地域文化研究専攻）修士課程・博士課程。
- ⑥職歴……東海大学文学部文明学科東アジア文明専攻専任講師（二九歳から七年半）、同助教授（三七歳から一年）、東京大学大学院総合文化研究科助教授（三八歳から九年）、同准教授（四七歳から八年）を経て現職。
- ⑦現地滞在経験……香港大学アジア研究センターに留学（二六歳から一年間）、米国ニューヨークに延べ二ヵ月滞在（四〇歳から四一歳の間に六回渡航）。子どもが生まれてからは短期渡航が中心、一泊二日、ゼロ泊三日から始めた。
- ⑧研究手法……できるだけ現地に足を運び、「現地感覚」を保持するよう努力。
- ⑨所属学会……アジア政経学会、日本華南学会、日本華僑華人学会、日本比較政治学会、現代中国学会、日本国際政治学会。
- ⑩研究上の画期……香港の域内政治の分析から出発したが、二〇〇三年のSARS以降、香港を周辺地域との関連性のなかで捉えるようになる。二〇一四年の雨傘革命で、香港政治が中国の内政化したことを確認。
- ⑪推薦図書……JCAS『地域研究』各号、古田元夫『ペトナムの世界史』（東京大学出版会、一九九五年）。